＊＊

「海の生き物を守る会」メールマガジン　No. 55　　2010.2.16（火）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html

＊＊

「今月の海」　京都府天橋立海岸

京都府北部の丹後半島の付け根にある「天橋立」は、舞鶴湾の水の流れによって砂が堆積した砂洲（砂嘴）でできた細長い半島。日本三景の一つとして昔から優れた景観で知られているが、この半島も砂の供給が無くなり、痩せて消滅の危機にある。現在は写真のように半島全体に人工突堤と砂の搬入でかろうじて砂浜を維持している。地元では世界遺産を目指しているが、ノコギリ状の砂浜では、自然遺産になるのは無理でしょう。砂の供給を復活することが大前提。

（2009 年 4 月京都府日本海側天橋立海岸にて　　向井　宏撮影）

＊＊

目次　　「今月の海」京都府天橋立海岸

1．海の生き物とその生息環境に関するニュース

2．海の生き物を守る会の現在の活動と予定

3．海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

4．新連載エッセイ－海中漫歩－（第１話）

「性の無い麗人」横濱康継

5．事務局便り

6．編集後記

7．「うみひるも」と「海の生き物を守る会」について

＊＊

1、海の生き物とその生息環境に関するニュース

【全国】

●司法のあり方が問われるクジラ肉裁判 公判開始

1 年半ほど前、国際保護区に指定されている南極海で調査捕鯨を行っている捕鯨船の乗組員らが鯨肉を山分けし、土産と称して鯨類研究所や水産庁の関係者らに配っていた事実を証明しようと、環境保護団体グリーンピース・ジャパンの佐藤潤一さんと鈴木徹さんが、運送会社の倉庫から証拠の鯨肉を確保し、証拠として検察庁へ提出した事件で、検察は捕鯨会社らの行為を問わない姿勢を明らかにした上で、二人を窃盗の疑いで逮捕した。

その第 1 回公判が、1 年半後の今月 15 日に開かれた。これまで公判前整理手続きが行われていたが、その中で明らかになった争点は、次のようだ。（1）二人に不法取得の意志があったかどうか。彼らは鯨肉を自分のものにして食べたり売ったりしようと思ったわけではない。（2）税金を使う調査捕鯨の不正を暴く目的で行った行為が正当行為として認められるかどうか。（3）憲法 21 条の「表現の自由」として認められるかどうか。（4）国際人権規約（自由権）で保護されるべきかどうか。

検察はこの事件を単なる窃盗事件として処理しようとしているが、青森地裁はこの事件について、検察側が主張しているような単なる窃盗事件として扱うのではなく、横領についても審理をせざるを得ないとして、単なる窃盗事件としないという見方を示した。

国際人権規約を批准しているヨーロッパの各国なら、このように税金を使った公共事業で不正が行われていることを知った場合は、その証拠品を抑えることを犯罪とは見なさないというのが一般的な見方であり、そのような判決がイギリスなどで定着している。日本の裁判所の人権感覚が問われている。

●鯨肉の横領事件について検察審査会に訴え

グリーンピース・ジャパンの星川淳代表と鯨肉の窃盗容疑の佐藤潤一被告は、調査捕鯨

で捕獲した鯨肉を横領したとして日新丸の船員らを告発していたが、東京地検が船員を不起訴にしたため、東京地方検察審査会に審査申し立てを行った。審査会が起訴をするべきかどうか審査を行う。昨年から検察審査会が二度続けて起訴相当と判断した場合は、検察の判断にかかわらず、起訴されることになりました。市民から無作為で選ばれる検察審査会委員がどのような判断を示すか、関心を持ち続けたいと思います。

【関東】

●南九十九里浜にヘッドランド群　サーファーが反発

日本の三大砂浜として知られている南九十九里浜も砂浜の消失に悩まされている。そのため、千葉県では、一宮海岸などに数百メートルおきに人工の岬（ヘッドランド）を構築中で、ヘッドランドの先には海岸線に平行に横堤突堤を伸ばしている。ヘッドランドの間隔が数百メートルなのだが、横堤突堤が 100m ほど伸びるため、外海に直接面している海岸線の距離はほぼ半減する。サーフィンのための外洋からの波の侵入が減少するために、サーファーたちはこの工事に反発を強め、「一宮の海岸環境を考える会」を結成し、250 名を集めて反対集会を開き、署名活動を始めた。

【北陸】

●漂着ポリタンク半減　全体では 40 日で 1 万個以上

環境省は、2008 年から日本海の沿岸に漂着するポリタンクの数を調査しているが、昨年 12 月中旬から今年 1 月 29 日までの約 40 日間に 1 万 1703 個を確認した。2008 年は 1 万 4871 個、2009 年は 1 万 2668 個で、徐々に減少している。そのうち、4 割の 4709 個にハングルの表記があった。日本語は 270 個、英語が 149 個、中国語が 85 個となっており、もっとも多くのポリタンク漂着が見つかったのは、秋田県であった。

新潟県では、合計 1014 個のポリタンクが漂着しているのが発見された。昨年に比べて漂着数は約半分に減少した。しかし、中には強酸性を示すものが含まれているものもあり、「見つけても触らずに、県や市町村に知らせて欲しい」と呼びかけている。

【近畿】

●サンゴを守ろうと　オニヒトデ駆除

和歌山県和歌山市の「紀州灘環境保全の会」など環境市民団体が白浜町の四双島でサンゴを保護するためにオニヒトデの駆除作業を行った。四双島は白浜町臨海の沖にうかぶ小さな無人島で、その周辺はサンゴが生育しており、ダイビングスポットとして親しまれている。近年オニヒトデが大量発生しており、このままではサンゴが全滅するおそれがあると言われて、同会などが調査や駆除活動を行っている。節分にちなんで「鬼退治」と称して 23 匹のオニヒトデを駆除したが、さらに多くのオニヒトデが生息しているとして、再び駆除活動を行った。今回は、ダイバーら 11 人が参加し、四双島周辺で約 1 時間潜水し、63 個

体のオニヒトデを捕獲した。

【中四国】

●上関町議選　原発反対派が敗退

山口県上関町の長島田ノ浦の埋め立て工事が差し迫っている中、同地に原子力発電所を建設させるかどうかを最大の争点として、任期満了に伴う上関町議選が 14 日行われた。今回は定員が 2 名減って 12 名。原発推進派から 11 名、反対派から 6 名が立候補し、原発関連の交付金で街づくりをするか、豊かな自然環境を守って自立できる第一次産業を守るかで、争われたが、結果は、推進派が 9 名当選、反対派は 3 名の当選に終わった。原発推進派は争点隠しに終始し、原発建設を既定事実として原発交付金による街づくりを公約にした。「長島の自然を守る会」代表の高島美登里さんは、防府市から上関町に住所を移して長島の自然を守れと反対派として立候補したが、落選した。昨年末に中国電力が補償金 125 億円の残り半分を漁協に配り、原発ができれば上関町に交付金が降ってくると、これみよがしに金をばらまいた結果だとすると、悲しい限りだ。

【九州】

●「裁判所は現地を見よ」　諫干開門訴訟

諫早湾の干拓事業が有明海の漁場環境を悪化させたとして、長崎県諫早市小長井町と佐賀県太良町の漁業者 41 人が、国（農水省）を相手にして、潮受け堤防の排水門を常時開放するように求めている訴訟の第 12 回口頭弁論が長崎地裁で開かれ、原告は裁判所に現地を視察するように求めた。裁判所は次回 3 月 15 日の公判時に視察をするかどうかを決定すると思われる。原告は排水門締め切りで干潟の消失や諫早湾内の流速低下などの悪影響が出ているとして「(回復するには）開門が唯一の方法」と強調した。

●瑞穂漁協が諫早開門調査に賛成

長崎県雲仙市の瑞穂漁協が、諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門の開門調査を巡り、これまでの反対から方針を転換、開門調査に賛成していくことを決めた。同漁協はこれまで長崎県の指導で、開門調査に反対してきたが、今月開かれた全員協議会では、開門調査による漁場環境の改善を期待する声が多く出て、方針を転換し、国や県に開門調査を求めることとした。

　瑞穂漁協の方針転換に対して、長崎県の金子原二郎知事は「開けたときの影響を本当に考えているのかなと思う」「調査したからといってすぐ原因がつかめるかどうかも分からない」と、県が行ってきた諫早干拓事業に対する反省の色もなく、瑞穂漁協の態度を非難した。

【沖縄】

●八重瀬町で自然環境保全条例制定　カサノリの保護など

沖縄県八重瀬町は、自然環境、動植物や地域資源などを一体的に保全するための町条例「八重瀬町自然環境及び観光資源保全条例」を制定した。沖縄県では初めての試みだ。今年 4 月 1 日から施行の予定。

自然環境や貴重な動植物など観光にも利用できる自然資源を守ることを目的としており、無断採取や自然の損壊行為などの違反者には最高 50 万円の罰金などを科することのできる罰則も入っている。八重瀬町は旧東風平町と旧具志頭村が合併してできたもので、旧東風平地区は那覇広域都市計画調整区に指定されており、開発に一定の規制があるが、具志頭地域は今後観光による乱開発のおそれが心配されており、保全の取り組みが求められていた。具志頭地区では、海藻カサノリなどの貴重種が自然群生しており、また、玻名城の海浜地区のように、美しい自然環境が残されているところもある。

●大浦湾のアオサンゴ群が回復

2009 年 10 月、大規模な白化現象がみられた名護市大浦湾のアオサンゴ群集が、順調に回復していることがわかりました。世界的にも類を見ない規模で、天然記念物の申請も出されている大浦湾のアオサンゴ群。2009 年 10 月、その 45.7%が白化していることが判明し、心配されていました。日本自然保護協会や地元の市民団体が継続調査した結果、11 月には半分以上が回復し、2010 年２月になってアオサンゴはほぼ元通りになったことがわかりました。短期間で回復したことについては、冬になって高水温が緩和されたことに加え、大浦湾が高い自然回復力を持つ豊かな海であることを示すものと分析しています。

５カ月間調査してきた西平伸さんは「今回のことでアオサンゴは結構強いということがわかったけれども、本島内でこれだけの群集は見たことがないので、ぜひ天然記念物の申請を通してほしいと思う」と話していました。天然記念物の陳情については、開会中の県議会２月定例会で審議される予定です。（安部真理子）

2、海の生き物を守る会　現在の活動と予定

全国の砂浜海岸生物調査にご協力下さい

多くの人が、多くの海岸でこの調査に参加していだけるようにお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームペ

ージ http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html　にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は58枚、全国37ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2－3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。これまで調査された砂浜の都道府県は以下の通りです。

北海道、青森県、神奈川県、千葉県、三重県、和歌山県、福井県、京都府、大阪府、兵庫県、香川県、徳島県、高知県、山口県、福岡県、沖縄県

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

●全国

NHK で倉谷うらら会員が「フジツボ熱中人」として紹介されます。本邦初ハイビジョンカメラ撮影による水槽内のフジツボの「足まねき」の映像が流れます。“熱中時間”「フジツボ熱中人」の放送と再放送の予定です。

★印のものが主な放送です。

【通常版】（１８分のフルバージョン）

★２月１３日（土）１８：００～１８：４４（ＢＳ２）　（この４４分の後半にフジツボについての１８分のＶＴＲが放送されます。これが第一回の放送です。以下再放送）

□２月１４日（日）２１：００～２１：４４（ハイビジョン）

□３月　１日（月）１２：００～１２：４４（ハイビジョン）

□「ＮＨＫオンデマンド」　２月１４日（日）１８時～２月２１日（日）２４時

（ＮＨＫオンデマンドとはインターネットで上記の時間に配信されるもののことです。）

【総合版】→フジツボについてのＶＴＲのみ、１５分の番組として放送されます。通常版のＶＴＲより３分短いものです。

★２月１７日（水）２２：４５～２３：００（総合）

★２月２０日（土）　７：３０～　７：４５（ＢＳ２）

★２月２３日（火）１５：４５～１６：００（総合）

★２月２３日（火）２３：５５～２４：１０（ＢＳ２）

【関東】

●造礁サンゴディスカバリーツアー房総・西川名　参加者募集

ＯＷＳ北限域の造礁サンゴ分布調査の一環として行っている「造礁サンゴディスカバリーツアー」第３弾を房総・西川名で実施します。ＯＷＳの造礁サンゴモニタリングサイトの坂田地区では、たくさんの造礁サンゴが確認されています。まだ定員に空きがあります。奮ってご参加下さい。

開催日：2010 年 2 月 28 日（日）日帰り　9：00～17：00（現地集合・現地解散）
開催場所：千葉県館山市西川名
対象：30 本以上のダイビング経験者でボートダイビングの経験者。
　　ドライスーツ着用をお勧めします。
定員：　8 名（最少催行人員 4 名）
参加費：メンバー：15,000 円／一般：16,800 円　※ボートダイビングフィー・保険料含む
お問い合わせ・お申し込み：ＯＷＳ事務局まで、E-mail またはお電話にてご連絡下さい。
　※詳しくはこちらをご覧下さい。⇒ http://www.ows-npo.org/activity/sango/discovery.html

●谷津干潟自然観察会（２月）

期　日　　2010 年２月 21 日（第３日曜日）　雨天中止
集　合　　津田沼高校前バス停　　午前 10 時
交　通　　ＪＲ津田沼駅南口から新習志野駅行または幕張本郷行き京成バスで
　　津田沼高校前下車。
持ち物　　観察用具、昼食、参加費 200 円。
担　当　　飯島、斉藤（047-432-9416）
主　催　　千葉県野鳥の会

真冬でも鳥たちは元気です。カモ類やユリカモメ、ハマシギの大群、干潟の周りではアカハラやアオジ、ジョウピタキ、オオジュリンなどの小鳥も見られます。珍鳥派は、ズグロカモメ、ハジロコチドリなどを探してみましょう。ハヤブサやオオタカなど猛禽類も。北風が吹くと非常に寒いので、大袈裟なくらい着込んで来て下さい。

●茜浜（習志野海浜霊園）ミニ探鳥会（２月）

日　時　　2010 年２月 21 日(日)　　雨天中止
集　合　　習志野海浜霊園管理事務所前、14 時半。
交　通　　ＪＲ京葉線新習志野駅（快速電車は停車しませんのでご注意ください）下車、徒歩約 15 分。あるいは京成津田沼駅からコミュニティバス海浜ルート終点下車（毎時 03、33 分発、所要時間約 30 分）徒歩約２分。
持ち物　　観察道具、その他（風が吹くと猛烈に寒いので防寒は怠りなく）。
　　参加費 200 円
担　当　　斎藤康裕　TEL：047-432-9416
主　催　　千葉県野鳥の会

恒例となりました茜浜のミニ観察会を１月から３月にかけて、ちょっとハードですが、谷津干潟自然観察会終了後にセットしています。習志野海浜霊園地先の海辺にいるカモやカイツブリの仲間たちを観察します。谷津干潟自然観察会の後で参加される方は、津田沼高校から新習志野駅行きのバスをご利用ください。解散は 16 時頃の予定です。

●「たゆた　祝島　写真展」とライブコンサート

とき：３月１２日（金）19:00～

ところ：三軒茶屋　cafe OHANA

出演⋆ＴＡＹＵＴＡ　live act

渡辺　克己　　語りべ

チケット⋆　2000円＋１オーダー

山口県瀬戸内海にぽっかり浮かぶハート型の小さな島　祝の島と書いて　祝島。去年の５月に初めて行き８月にはコンサートを開いてもらいました。タユタが出会った祝島を知っていただきたく今回　たゆたの祝島ツアーの写真をメインに写真展ライブを開きたいと思います★この日はナレーターの渡辺克己さんを迎え　祝島対岸にある上関に伝わる伝説を語っていただきたいと思います。

●　第51回トークセッション
「海の生き物を撮る－動画でどうだ！」　参加者募集

ゲストスピーカー:古島　茂　（水中ムービーカメラマン）

私がこれまで２０数年に渡り、動画専門に水中撮影をしてきた映像の中から印象に残った決定的瞬間を見ていただき、その時々の現場の状況、撮り手の精神状態などを解説します。また、直前に取材するインドネシアのラジャアンパッドの海の新鮮映像を簡易編集でご紹介する予定です。初めての海でいったいどんな映像が撮れ、どのように編集されるのかは、今のところまったく分からない。分からないから面白い！（古島）

⇒ http://www.ows-npo.org/activity/ts/index.html#ts

開催日　　2010年3月5日（金）19：00～21：00 (18：30受付開始)

会場　　d-labo　港区赤坂9-7-1　ミッドタウン・タワー７Ｆ

参加費　　無料

定員　　50名程度

共催　　スルガ銀行・ＯＷＳ

申込み　　スルガ銀行d-laboまで。ホームページまたはお電話で事前にお申込み下さい。

TEL：　03-5411-2363（担当：高橋・加藤・小名木）

⇒ http://www.d-labo-midtown.com/d-log.php

（注：d-laboホームページでは、2/5頃に受付を開始する予定です）

●　OWSネイチャーガイドトレーニングコース　参加者募集

恒例のＯＷＳネイチャーガイドトレーニングコースを開催します。ネイチャーツアーにおけるフィールドでの自然解説や、自然観察指導を行うプロのネイチャーガイドの養成コースです。

期間　　2010年3月19日～3月22日（国内コアコースの開催）
場所　　国内コアコース：三浦半島
　　海外インターンコース：ミクロネシア・パラオ
⇒ http://www.ows-npo.org/activity/ntc/index.html

●「海藻おしば協会指導者養成講座」
シリーズ第３回目（漂着海藻採集と保存・管理を学ぶ／春の勉強会併催）

日時：2010年3月20日（土）~21日（日）の１泊2日
場所：筑波大学下田臨海実験センター実習室
対象：一般（協会登録条件）／海藻おしば協会会員
参加料：￥6,000（テキスト代・保険代含む／交通費・宿泊費別途）海藻おしば協会会登録費￥3,000（入会金・年会費・海の森基金など）登録済みの方を除く
宿泊：民宿小川予定（筑波大学下田臨海実験センターそば）
講師：田中次郎先生（東京海洋大学／海藻おしば協会顧問）・野田三千代氏（海藻おしば協会会長）・横浜康継氏（海藻おしば協会顧問）
サポート：海藻おしば協会認定指導者
事務局：尾澤征昭
内容★第1日目／3月20日（土）午前10時30分：現地集合・受付・開校式
11時～14時 周辺の海辺での漂着海藻採集と観察会
　　＊弓ヶ浜（砂浜）／逢ヶ浜・（磯）＊車での移動／途中昼食
　　＊海藻採集指導：野田会長／横浜顧問＊磯の観察会指導：田中次郎先生
15時00分～16時＊海藻の下ごしらえや保存管理の実習（色止め・冷凍保全）認定指導者
16時～17時＊採集した海藻も使って作品づくり《ハガキ１枚》＊サポート認定指導者
18時30分～21時（夕食／懇親会／費用は宿泊費に含む）
　　＊なお、当日民宿に宿泊しない方は￥4,000で参加可能
★第2日目／3月21日（日）午前9時30分～12時＊海藻おしば作品仕上げとラミネート加工実習＊サポート認定指導者
13時～14時 ＊海藻と海藻おしば教室に関わる何でも質問コーナー
　　＊田中次郎先生／野田三千代会長／横浜康継顧問
14時～14時30分 参加者全員で教室の後片付け（原状復帰）終了後解散
浜や磯で海藻採集後は、海藻の保存や管理、色止め、作品の仕上げまで学びます。
＊参加申し込みは参加申込書にご記入の上、メールまたはＦＡＸあるいは郵送にて海藻おしば協会まで。〒410-0025 静岡県伊豆市熊坂1257-215 TEL&FAX：0558-72-1236

●ぶんぶん通信②上映会

とき：3 月 14 日(日) 開場　11：30　開演　12：00

＊A SEED JAPAN メンバーによる祝島訪問レポートトーク　有
料金：1000 円（1 ドリンク別）
ところ：代官山　「晴れたら空に豆まいて」　◯キネマれんず豆●　〒150－0034　渋谷区代官山町 20－20 モンシェリー代官山 B２　℡：03－5456－8880　www.mameromantic.com
ご予約：ticket@mameromantic.com
主催：【A SEED JAPAN】http://www.aseed.org/

【近畿】

●鎌仲ひとみ監督作品「ぶんぶん通信No.2」上映会と向井宏さん講演会

とき：2月28日（日）14時～
ところ：京都堺町画廊（京都市中京区堺町通り御池下る）℡：075-213-3636
参加費（びわ茶付き）：映画のみ　800円；　講演のみ　500円；　通し　1000円
スケジュール：
14:00～15:00　「ぶんぶん通信No.2」上映
15:10～16:10　向井宏さん講演「長島の海はなぜ貴重なのか？―原発建設で失われるものー」
16:10～16:40　質問・交流
17:00～18:00　「ぶんぶん通信No.2」2回目上映
18:20～19:20　シェアタイム
参加者はできるだけ事前に連絡して下さい。連絡先：090-8563-7922　s.takano@y3.don.ne.jp（高野）

【中四国】

●第一回おかやま環境シンポジウム～ アマモから瀬戸内海再生を考える ～

「海のゆりかご」＝アマモ場を知っていますか？干潟より海の方に広がり、干潮時も干上がらないところにアマモ場があります。海の生きものの産卵場・養育の場になることから「海のゆりかご」とも呼ばれます。大事なアマモ場が、高度経済成長期に激減。私たちの食べる魚の育つ環境はどうなっているのでしょう。第一回おかやま環境シンポジウムは瀬戸内海の再生を主要テーマにし、アマモをキーワードに各地の情報交換・共有、交流を行います。証言・調査から、かつてのアマモ群生、失われた状況、回復状況をマップにし、変遷を確認します。

日　時：2010 年2 月27 日（土）　13～16 時
場　所：　オルガ5 階スカーレット（岡山市北区奉還町１－７－７）
参加費：　５００円
定　員　：50 名　（※ 定員になり次第、締め切ります。）
対　象　：関心のある市民の方、アマモ場再生に取り組む団体、漁業者、研究者、行政、
主催・企画運営　（財）おかやま環境ネットワーク 自然環境部会

当日のスケジュール

13：00〜13：10 開会挨拶 青山 勲 （財）おかやま環境ネットワーク理事長

13：10〜13：55　基調講演

「アマモ場・干潟の役割と現状などの概論（仮）」福田 富男さん（元岡山県水産試験場職員・医学博士、アマモ場に関する専門家。アマモ場が瀬戸内海で果たしている役割・機能・重要さなどに詳しい）

13：55〜14：20　近年の調査報告

○岡崎 知治さん（岡山県水産課職員、岡山県のアマモ場を調査した専門家）

14：30〜15：25　各地での取り組み・状況報告 10 分×5 地区

○本田 和士さん（日生町漁協組合長、小型定置網歴60年、波静かな日生の海のアマモ場と漁業の歴史の生き証人）

○桑田 正三さん（元漁業者、塩田に埋め立てられるより昔の錦海湾は、アマモが広々と繁茂し、豊かな魚類に満ちていた―と当時を生き生きと振り返る）

○西野 隆久さん（元大畠漁協組合長、多島の海で流れや魚種に変化が大きい備讃瀬戸での漁業歴60 年。近くが巨大な水島工業地帯になった歴史も体験）

○森中 憲治さん（神島環境対策特別委員会委員長、眼前の笠岡湾が干拓されて残る海辺にアマモ場を再生しようと奮闘中）

○塩飽 敏史さん（(財)水島地域環境再生財団研究員、味野湾のアマモ場の調査・研究と保護をはじめ瀬戸内海の環境問題に取り組んでいる）

◆コーディネーター：近藤 紗智子さん（環境学博士△海底に堆積した土砂の問題を中心に瀬戸内海の環境問題を追究中）

15：25〜15：55 報告の補足・参加者との意見交換

15：55〜16：00 閉会挨拶・アンケートの記入のお願いなど

◇参加申込み FAX・メール・郵送等で下記まで送付ください

（財）おかやま環境ネットワーク 栂﨑（とがさき）

〒700-0026 岡山市北区奉還町一丁目7 番7 号（オルガ5F）

電話/FAX：086-256-2565 業務時間：平日8：30〜17：00

E-mail：kankyounet@okayama.coop HP：http://www.okayama.coop/kankyo

●第１回里海創生シンポジウム「いま「里海」の理念を問う」

とき：3 月　3 日(水)13:15〜16:30

ところ：兵庫県民会館　９階　けんみんホール

神戸市中央区下山手通 4-16-3 （TEL 078-321-2131）

内容：(１) オープニング　さわやかステージ（予定）

(２) 開会　NPO 法人環境創生研究フォーラム理事長　小林　悦夫

(３) あいさつ　兵庫県瀬戸内海環境保全連絡会会長　井戸　敏三

（4） 基調講演　鷲尾　圭司　（独）水産大学校　理事長

テーマ：「瀬戸内海の生き物と環境」

（5） パネルディスカッション　テーマ：「いま「里海」の理念を問う」

① コーディネーター　村岡　浩爾　　大阪大学　名誉教授

② コメンテーター　　鷲尾　圭司　（独）水産大学校　理事長

③ パネラー　環境団体　松本　宣崇　環瀬戸内海会議　事務局長　漁業団体　上村　広一　坊勢漁業協同組合　組合長（県漁連と要調整）　消費者団体　　山岸　ひろ子　生活協同組合コープこうべ　理事（社内で要調整）　研究者　柳　　哲雄　九州大学　教授

●「アースデイ瀬戸内 2010」

この海から地球が見える！

この穏やかな瀬戸内海。じつは日本にある約半数、3,000 もの島と激しい潮流を持つ、世界的にも貴重な海で、古くから自然の知恵と豊かな海洋文化が花開いてきました。

私たちのすぐそばにあるこの海をもっと知り、もっと楽しむと、地球の息づかいが聞こえてきます。４回目の開催となる今回の『アースデイ@瀬戸内』のキャッチフレーズは「出航！未来への方舟（はこぶね）」です。美しい地球を未来へつないでいくために、今私達に何ができるのか。みんなで考えて、そして実行していきましょう。「アースデイ@瀬戸内 2010」は、2010 年 4 月 17 日（土）・18 日（日）に開催予定です。詳細につきましては、しばらくお待ちください。

4．新連載エッセイ―海中漫歩―

（第一話）性の無い麗人

横濱康継（南三陸町自然環境活用センター長）

「海中漫歩」について

29 歳から 63 歳までの 34 年間を伊豆半島先端近くの海辺で過ごしたあと、南三陸の海辺に移住して 11 年になる。私の研究対象は海藻なので、45 年間も海藻とつきあってきたわけだが、「ワカメの研究で 45 年も？」と呆れられることがある。我が国ではワカメが海藻の代名詞みたいになっているためなのだろうが、海藻は世界中に約 9,000 種、日本列島の沿岸でも 1,500 種ほどが知られているのである。しかもワカメという 1 種だけを相手に人生のほとんどを費やした研究者も存在する。ワカメにも生きた生物として、味噌汁の中に漂う姿からは想像できないような、私たちヒトという生物よりはるかに複雑な「人生？」ではなく生活環がある。

生物学者は変わり者とみられがちだが、植物学者は動物学者からも変人と思われる傾向がある。魚、鳥あるいは昆虫のように動きまわることもない植物を相手に何が面白いかというわけなのだろうが、植物の中でもさらに目に見えない海中に潜み花も咲かせない海藻などを相手に、ほとんど一生を費やしてしまう人物の存在は謎に近いと言えるのだろう。そのような謎に近い存在の一例である私が、海藻や同じように海底に暮らす海草などに感情移入しながら、筆（実はパソコンのキーを押す指）の赴くまま、夢見気分で漫然と書き綴ったところ、やはり「私は変人！」と自覚せざるをえないような拙文が何編か生まれてしまった。世の中にはこのような変人も存在する、ということを確認するつもりでお読みいただけたら幸いである。

海中漫歩　第一話　「性の無い麗人」

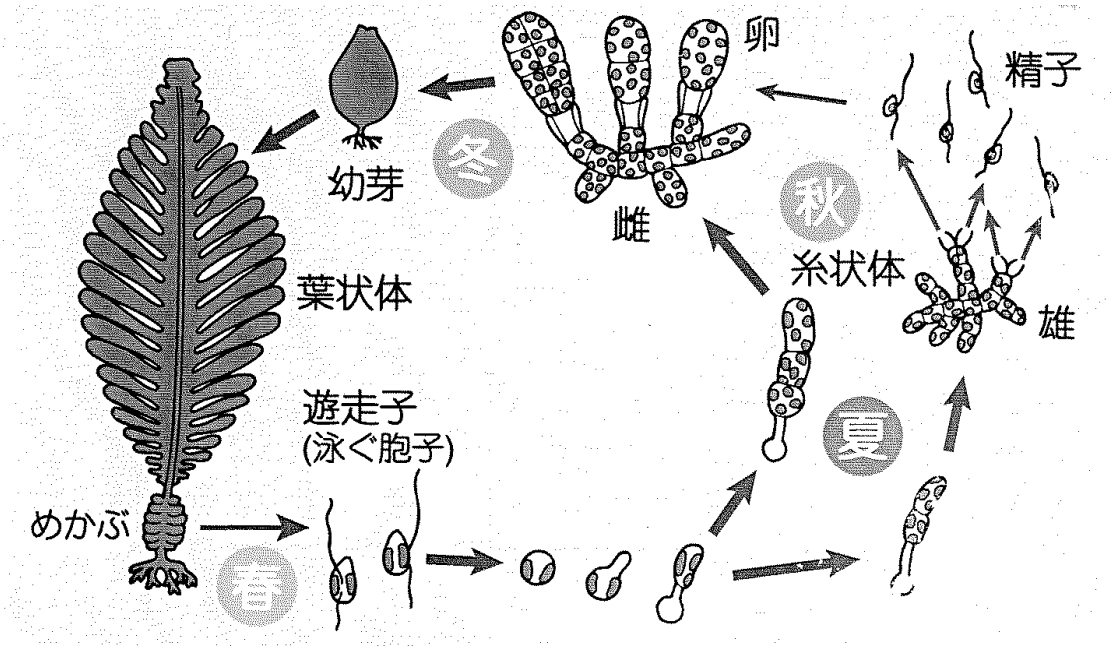
まちなかで男か女かわからないが心惹かれる若者を見かけ、「ボーイッシュな女の子！」と思って声をかけたら、「私は男でも女でもありません」という答えが返ってくる。人間の社会でこんなことはあり得ないのだが、海藻を含む植物の世界では雄でも雌でもない個体がごくふつうに存在しているのである。

ヒトをはじめとする動物では、雄と雌という両親から生まれる子はやはり雄か雌になる。

しかし植物の世界では、雄と雌という両親からは雄でも雌でもない子が生まれ、そして孫は雄か雌になるというように、性の有る世代と性の無い世代とが交代するのである。このような植物の「世代交代」は高校の生物の授業では勉強しているはずなのだが、定期試験や大学入試が終わるとすっかり忘れてしまう。けれどもこれは私たちにも大変身近でしかも重要なことなのである。

ワカメの「めかぶ」は都会でも手に入る健康食品として親しまれるようになったが、これはワカメという植物の生殖器で、ここからは卵でも精子でもない胞子が放出される。ただこの胞子は 2 本の鞭毛を振って海水中を泳ぐので遊走子と呼ばれている。植物の細胞のはずの胞子が動物のように泳ぐ。これだけでもおどろきなのだが、植物の世界はもっと驚くべきことにあふれているのである。

みそ汁の具などになるワカメは秋に芽生え春先には長さ 1〜2 メートルに成長するが、春が近づいた頃に生殖器官としての「めかぶ」が根元近くに形成され、成熟するとそこから遊走子という「泳ぐ胞子」が無数に放出される。遊走子をすっかり放出したあとのワカメの体は枯れてしまうのだが、遊走子は海底に付着して発芽し、雄か雌になる。そして秋になると雄から放出された精子が雌の体に形成された卵へたどり着いて受精し、受精卵は発芽して成長し、やがてめかぶを形成し、そこから遊走子が放出されるというわけである。



（上図　ワカメの生活環）

ワカメの場合、秋に芽生えて冬のあいだに成長し春にめかぶを形成する体は、雄でも雌でもない無性の体なので、この世代を「無性世代」と呼ぶが、雄でも雌でもない無性の体は胞子を放出するという意味で「胞子体」と呼ばれる。そして胞子（遊走子）から芽生えた雄と雌の世代は「有性世代」と呼ばれ、雄と雌の体は「配偶体」と呼ばれるが、これらのワカメの配偶体はミクロな毛状なので肉眼では見えない。そのためワカメは春を過ぎる

と消えてしまうように私たちの目には映るのだが、実際には微細な毛のような体になり、薄暗い海底でひっそりと夏を越すのである。

なぜワカメは巨大な胞子体とミクロな配偶体という妙な親子関係を繰り返すのかと、不思議に思うだろう。こんなことをだれが見つけたのかと、少し呆れた思いにもなるかもしれない。ワカメがどのような親子関係を繰り返そうと、私達の生活には何の関係もなさそうなのに、これほど詳しいことを「発見」してしまうなんて、よほどの暇人の仕業なのではないか、と思う人も多いだろう。そして、そんな「暇人」のほとんどは国民の税金で生活し研究を続けている大学の教官や研究所の職員なので、その典型のような私は「税金ドロボー」と言われてしまいそうである。最近は我が国の政府首脳から文部科学省の上層部までがそのように思い始めているらしく、そのため「ワカメは春に枯れてから秋に芽生えるまでどこにひそんでいるのだろう」というような純粋な疑問が原動力の「役に立ちそうもない研究」を志向する研究者は、日本の大学などではとても居づらくなり、今や「絶滅」の危機に瀕しているのである。

（上図　ワカメの養殖風景）

今日の日本で私たちが食べているワカメも海苔も、そのほとんどすべてが養殖されたものなのだが、これらの海藻の養殖技術はワカメやアサクサノリの仲間の親子関係が明らかにされたために確立されたのである。しかし海藻の親子関係などについての研究のほとんどは、「なぜ」という純粋な疑問から始まるのである。その結果がたまたま養殖技術の開発に貢献したとしても、子供のように好奇心旺盛な研究者にとっては副産物にすぎない。生

物学をはじめとする「役に立たない」基礎科学の研究者にとっては「なぜ」がすべての原動力であり、この「なぜ」は「なぜ私たちは存在するのか」というヒトという生物にとっての根元的な問題にまで迫る性質のものなのである。

「ボーイッシュですてきな女の子？」で始まった話が大分それてしまったので、元へ戻そう。

海藻の親子関係などを調べるのは分類学者の仕事だが、どうしてワカメは夏をミクロな配偶体で過ごすのかという疑問は、生理学や生態学の研究者によって解き明かされることになる。

分類学者によるビーカーや試験管などを使った培養実験によって、配偶体は高温に強いということは判明していたのだが、ワカメの胞子体（食用になる体）の葉から打ち抜いた５円硬貨大の葉片とミクロな配偶体とで光合成と温度との関係を比較するというような実験をおこなうと、胞子体は配偶体よりはるかに高温に弱く低温に適しているということがわかる。

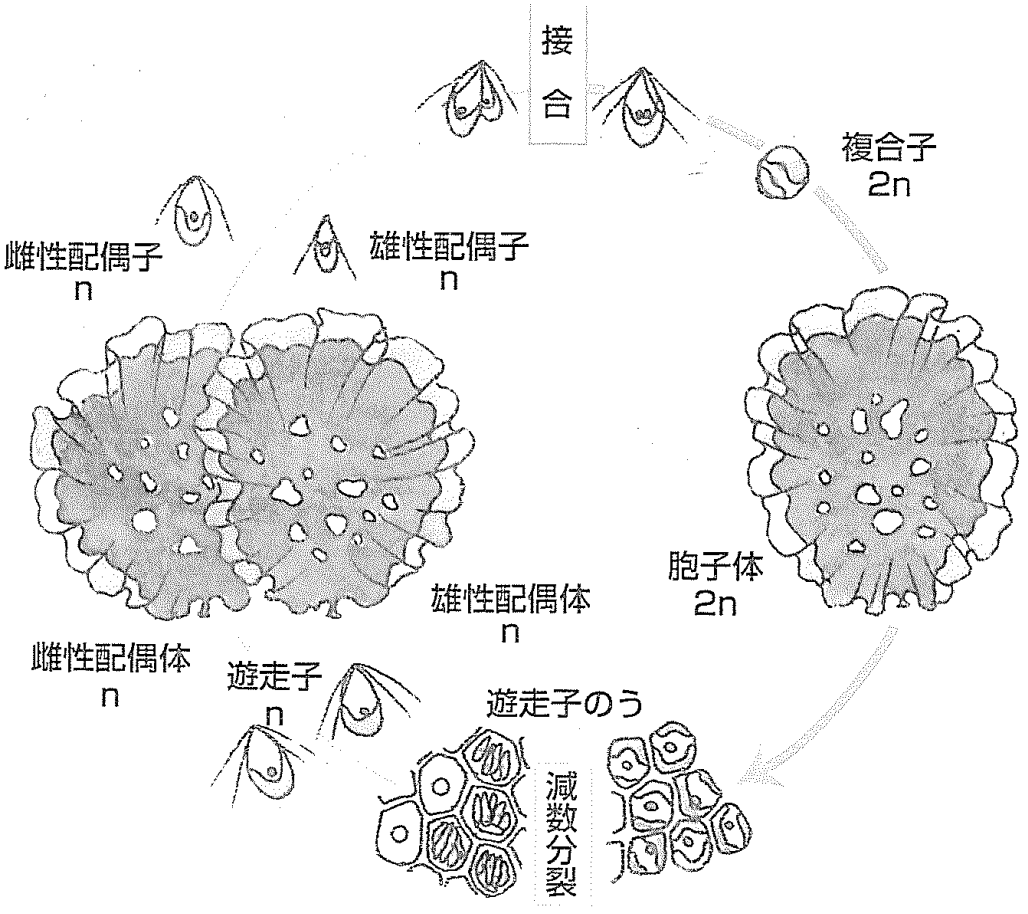
ワカメの胞子体は高温に弱いが、その子供にあたるミクロな配偶体は夏の高温にも耐える性質がある。そして秋に胞子体も生きられるほどに海水温が下がると雌雄の配偶体の生殖、つまり卵と精子の受精によって胞子体が生まれる。このようなことがわかったため、めかぶから放出された遊走子を糸に付けて、芽生えた配偶体を夏のあいだ陸上の海水プールで育て、秋になってから海面に張ったロープにその糸を巻いたりはさんだりする、という養殖技術が開発されたのである。

高温に弱くて低温に適した胞子体は秋に芽生えて春に遊走子を放出して枯れ、遊走子から芽生えた高温に強い配偶体は夏を越して秋に胞子体を生む、という親子関係は驚くほど合理的である。しかしこのような親子関係は、私たちには非現実的に思えるうえ複雑すぎて理解しにくい。私たちヒトという生物の世界では、親・子・孫がすべて「配偶体」である。つまり私たちの親子関係は「配偶体」の繰り返しなので、配偶体が胞子体を生み胞子体が配偶体を生むというような、有性世代と無性世代との交代という現象はピンとこない。しかし宇宙のどこかの星には、ワカメのような世代交代を繰り返す知的生物が住んでいるのではないか、と考えてみたらどうだろう。

ただ親と子がワカメの胞子体と配偶体ほどに大きさが違っては具合が悪いだろう。ところが海藻の世界にも配偶体と胞子体とが全く区別できないほど大きさも形もそっくりという種が存在するのである。その代表格は私たちにもかなり身近なアオサの仲間で、緑色のビニールシートのように広がる葉の形は胞子体も配偶体も同じなのだが、成熟したときだけ、遊走子や配偶子（卵や精子にあたる）の形成された葉の縁辺部の色が胞子体と配偶体とで少し違うということから、なんとか判別できる。

ヒトの世界でもアオサの仲間のように配偶体と胞子体がそっくりな体のままで街を歩いていたとしたらどうだろうか。魅力的な若い胞子体に出会って、男性（雄性配偶体）は「ボーイッシュな少女？」と思い、女性（雌性配偶体）は「母性本能をくすぐられる！」など

と思って声をかけてみたくなる、といこともあるだろう。ところが「私は女でも男でもありませんから」などとデートへの誘いを断られたりしたらショックだろうか。逆に実際には雌性配偶体（つまり女性）なのにプロポーズを断る口実として「胞子体ですので」などと知恵をはたらかすことも可能になるだろう。



（上図　アナアオサの生活環）

配偶体が胞子体を産み胞子体は配偶体を産むという親子関係がヒトの世界でも繰り返されたらどうなるか、などという奇想天外な仮定によって、海藻の複雑な親子関係を理解してもらおうと、こんな話しを思いついたのだが、逆に海藻の中にも配偶体が配偶体を生むというヒトと同じ親子関係を繰り返す例外的な種が存在する。それはホンダワラの仲間で、その中にはヒジキも含まれる。ホンダワラの仲間の多くは雌株と雄株の別があり（雌雄同株の種類もある）、春に成熟すると、それぞれ雌性生殖器床と雄性生殖器床という雌雄の生殖器を付けて卵と精子を作り、それらの接合（合体）した受精卵が海底で発芽すると親と同じ雌株か雄株になる。つまりヒトと全く同じ親子関係を繰り返すのである。

無数の褐色の卵が付着した雌性生殖器床が陽光に輝く様子は、万葉集の中に「なのりその花」として詠われている。「なのりそ」とはホンダワラ類を呼ぶ万葉の頃の植物名なのだが、「告げるな」という意味にもなるので、ひそやかな恋を詠う歌に登場する。

次回は春の磯に咲く「なのりその花」を眺めるいにしえの恋人たちの話です。お楽しみに。

5．事務局便り：

●このメールマガジンは、毎月 1 日と 16 日の 2 回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。

●このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひるも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。

●本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。

●本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会」へ。

6．編集後記

「連載エッセイ」が「新連載エッセイ」となり、横浜康継さんが新しく書き下ろしたエッセイを寄せていただきました。題して、「海中漫歩」。海に潜る海藻学者による楽しくためになるエッセイです。お楽しみ下さい。（宏）

7.「うみひるも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円／年、団体 20,000 円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局

hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp　**（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。**

メールマガジン『うみひるも』第 55 号　2010 年 2 月 16 日発行

発行＆編集人「海の生き物を守る会」代表　向井　宏

〒606-8244　京都市左京区北白川東平井町 23-1　グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html

銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会